

講義名	スポーツ科学演習 A (バドミントン/卓球)			
担当教員	中尾 泰史			
開講期・曜日・時限	後期 木曜日 4時限	授業形態	演習	
履修開始年次	1年生	単位数	2	備考

主題と概要				
<p>身体活動を通じ、自身の体力、体調を把握する能力を養う。また心身の健全な発育、発達に対する気づきを高め、生涯における運動実践の重要性を知る。さらにチーム、グループ単位の活動を体験しながらコミュニケーション能力、協調性など、他者とのつながりを築く社会的教養も学ぶ。</p>				

到達目標				
<p>1. 「健康」獲得の方法を修得できるようになる。 2. 歴史やルール、基礎技術を理解し、説明できるようになる。 3. 基礎技術を修得し、生活にわたるスポーツ実践の礎とすることができるようになる。 オンデマンドでの受講では、以上の到達目標を達成することが難しい。このため、対面授業とする。ただし、新型コロナウイルス感染症の感染者、または、濃厚接触者に指定され、一時的に通学が禁止となった学生については、その期間のみ課題学習などによって対応する。</p>				

提出課題				
課題提出は講義中に指示する。				

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバック				
実践種目の専門技術習得については、プレー中に各自の体力、運動能力にあわせ、無理なく指導、アドバイスする。				

評価の基準				
<p>授業実施時間数の4回以上欠席した者は単位を認定しない。 授業中の評価：受講態度など.....20% 中間期の評価：レポート課題.....10% 期末期の評価：レポート提出.....10%</p>				

履修にあたっての注意・助言他				
<p>授業中、スポーツを実践していなければ、欠席とみなされる場合がある。 必ず運動用の服装（シャツ、パンツ、短パン等）と室内シューズ（ひも付）を着用すること。 授業中はアクセサリ類（ピアス、ネックレス、指輪）は外し、眼鏡の着用は、極力避けること。 病気や体調不良によってやむを得ず欠席しなければならない時、および持病やけがのある場合、事前に申し出ること。 受講生の技術習熟度によって授業計画を変更する場合がある。</p>				

教科書				

プリント資料及び参考文献				
資料は必要に応じて配布する。				

授業計画				
<p>1回：ガイダンス 2回：バドミントンの基礎練習（サーブ、クリアー） 3回：バドミントンの基礎練習（スマッシュ、ドライブ） 4回：バドミントンの実践（シングルスゲーム） 5回：バドミントンの実践（シングルスゲーム） 6回：バドミントンの実践（ダブルスゲーム） 7回：バドミントンの実践（ダブルスゲーム） 8回：スポーツ・健康に関連した講義 9回：卓球の基礎練習（サーブ） 10回：卓球の基礎練習（レシーブ、ノック） 11回：卓球の基礎練習（バックハンド、スマッシュ） 12回：実務競技の歴史、技術に関する講義 13回：卓球の実践（シングル） 14回：卓球の実践（シングル、ダブルス） 15回：卓球の実践（シングル、ダブルス） グループ練習、ゲーム形式の実践は、新型コロナウイルス感染症の状況によって変更となる。変更時は授業中にアナウンスする。</p>				

授業形態（アクティブ・ラーニング）				
	ア：PBL（課題解決型学習）			イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
	ウ：ディスカッション、ディベート			エ：グループワーク
	オ：プレゼンテーション		○	カ：実習、フィールドワーク
	キ：その他（A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）			

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間				
<p>本学では、学期上、2単位を修得するためには、15回の授業と、1回の授業に対して、4時間の予習・復習等の教室外学習が必要であるとされている。簡単な競技技術はインターネットやYouTubeの映像を見てイメージしておくこと。また授業前後に学生同士でフォームチェックやルールの確認もしておくこと。</p>				

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連				
<p>本科目を受講し、目標を達成することで、本学の学生が卒業時に共通して身につけておくべき資質・能力の5項目および、健康スポーツ科学のカリキュラムポリシーへ貢献することができる。集団や個人でスポーツ実践へ取り組む中で、明るく元気で、どのような場所でも物怖じすることなく、誰とでもしっかり言葉を交わすことができ、逆境でもたくましく生き抜く力、つまり「ネアカ」のびのび・「へこたれず」の精神を育むことができる。また、問題点やその要因を察知し、自らが見込んで取り組めるようになる。そして、他者に働きかけ、協力して課題へ取り組むことにより、円滑なコミュニケーションをとることができるようになる。生涯にわたってスポーツと関わったり、健康の維持・増進に努めたりすることができるような知識を得て、理解することができる。以上は、全学部・学科の所属学生へ共通している。</p>				

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述				

実務経験の有無及び活用				

備考				